

特別支援学校卒業後の成人障がい者に対する運動支援と支援体制の確立

立教大学 松尾ゼミナール A 班

○近藤 寛海・大島 菜月・小松 恭子・蓮井 千那魅

清水 晃哉・佐々木 綾乃・齋藤 匠馬・高柴 裕

1. 緒言

第2期スポーツ基本計画によれば、2022年までに成人以上の障がい者（以下、「成人障がい者」とする）の週一回以上のスポーツ実施率を40%にすると謳われているが、スポーツ庁の調査（2018年）によると、成人障がい者の週一回以上のスポーツ実施率は全体の約19%に過ぎない。成人障がい者のスポーツ実施率を引き上げるためには特別支援学校卒業後の生活に着目する必要がある。特別支援学校卒業後については図1に示すように社会福祉施設を利用している人が約7割にのぼる。

そこで本提言では、社会福祉施設利用者の運動支援とその支援体制の確立について提案する。

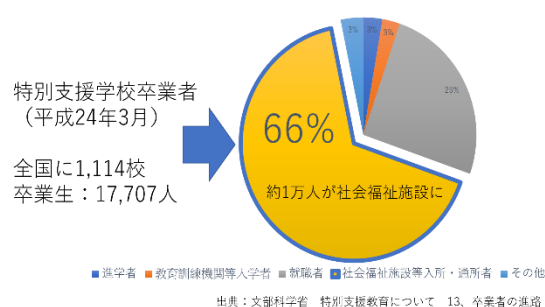


図1.特別支援学校卒業後の進路

2. 研究の方法・結果及び考察

(1) 先行研究の調査

ア、社会福祉施設における運動支援の現状と課題

- ・成人障がい者の運動場所:「社会福祉施設」が41%である。(東京都, 2012)
- ・「施設によって作業内容は異なり作業による運動量確保が難しい場合や、職員のゆとり不足から運動やスポーツにまで力を入れることが難しい施設もある」(山本, 2012)
- ・「指導者やボランティアの不足、スポーツ施設の不足等」(山本, 2012)がある。

→社会福祉施設における運動機会の不足、指導者等の不足

イ、機関同士の連携をめぐる課題

- ・「障害者スポーツの行政主管課や障害者スポーツ協会をはじめとする障害者スポーツ関係団体・施設が障害者スポーツ推進の中核になりつつ、学校、教育委員会、スポーツ・レクリエーション関係団体、社会福祉関係団体、(社会福祉協議会、障害者福祉団体、障害者のボランティア活動に関わる団体を含む。以下同じ。)医療関係団体との連携・協働体制を構築し、それぞれが有する人材や資源を有効に活用しながら推進していくことが必要であると考え」(文部科学省, 2016年)
- ・社会福祉協議会と障害者スポーツ協会の協力関係は10%。(笹川スポーツ財団, 2015)

ウ、指導員の活動をめぐる課題

・「障害者にスポーツや運動を指導する時は不安なく指導することができますか。」という質問に対して、「不安がある」と答えた人は46.9%。(文部科学省, 2014)

(2) 作業仮説の提示：成人障がい者における障壁

今回、我々は障がい者スポーツにおける障壁を先行研究やデータより以下の3つであると仮定した。①日本障がい者スポーツ協会と社会福祉施設を繋げるための社会福祉協議会、それぞれの機関の連携が不足していること。②在学時に当たり前にあった運動機会の供給（夏休みのプール開放や運動会など）がなくなることにより、卒業後、障がい者に対する運動支援が不十分であること。③指導員、ボランティアの不足といった支える要素の不足。これらを作業仮説としてインタビュー調査を行った。

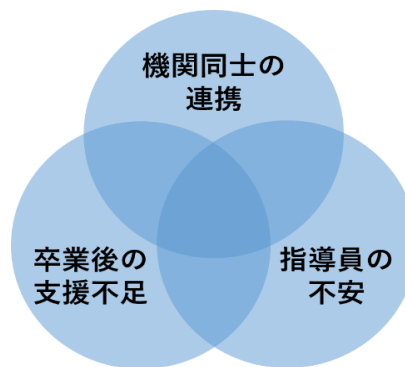


図 2.成人障がい者における障

(3) インタビュー調査

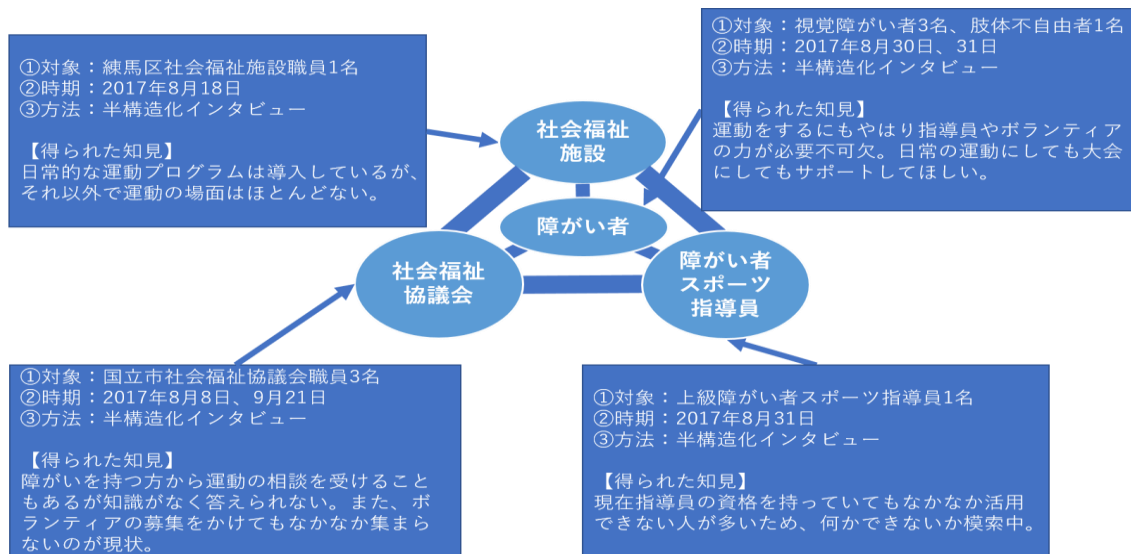


図 3.インタビュー調査まとめ

3. まとめと提言

(1) まとめ

インタビュー調査結果を踏まえ、社会福祉施設は当事者の運動の不十分さ、社会福祉協議会は現場の支援者を募ることができていないこと、障がい者スポーツ指導員は資格保持者の活用を望んでいる状態にあること、そして当事者は日常運動における支援者を欲していることが分かった。よって我々は、先行研究及びインタビュー調査によって、支援策を提言する上で作業仮説として立てた3つの障壁を解消することが重要だと考えた。

(2) 提言

具体的な支援策：「STEP UP PROJECT ～みんなの環を拓けよう～」(図4)

ア、支援策の内容

・ [パラリンピック種目ボッチャの採用]

ボッチャはパラリンピック種目であり、『障がいの有無』、『老若男女』に関わらず誰でも楽しむことができる種目であるため、プロジェクトのメイン種目として採用した。

・ [日常的な活動の促進]

イベントで体験したボッチャを施設活動時のみならず、自宅での保護者との活動を促進するためにマイボールの作成、用具の貸し出し、必要に応じて初級指導員が出向いて指導する。

・ [「する」「見る」「する」のイベントと日常活動を繋ぎ、地域スポーツクラブと繋ぐ]

初めの「する」でボッチャに興味を持ってもらうために体験会を行う。ここでは、ボッチャボールを手作りし、簡単にプレイするなどしてルールを知る。次の「見る」では、実際の大会を観戦することで、楽しみの多様性を実感する。ここで「する」楽しみを感じるか「見る」楽しみを感じるか考えてもらい、それを最後の「する」のボッチャイベントを開催している各施設が集まり、合同練習会を行うことで確認できる。また、そこで興味を持った人たちへクラブチームや総合型スポーツクラブの案内を行う。

・ [中級・上級指導員の支えによる初級指導員指導への自信の獲得]

障がい者スポーツ指導員は初級指導員と中級・上級指導員が同じグループとなって活動していく仕組みとなる。グループでイベント内容を考案するが、初級指導員はフィードバックを受けながら企画していく。これにより、初級指導員の不安は減少に向かい、自立性が向上する。また、中級・上級指導員の補助も徐々に減っていく形となる。

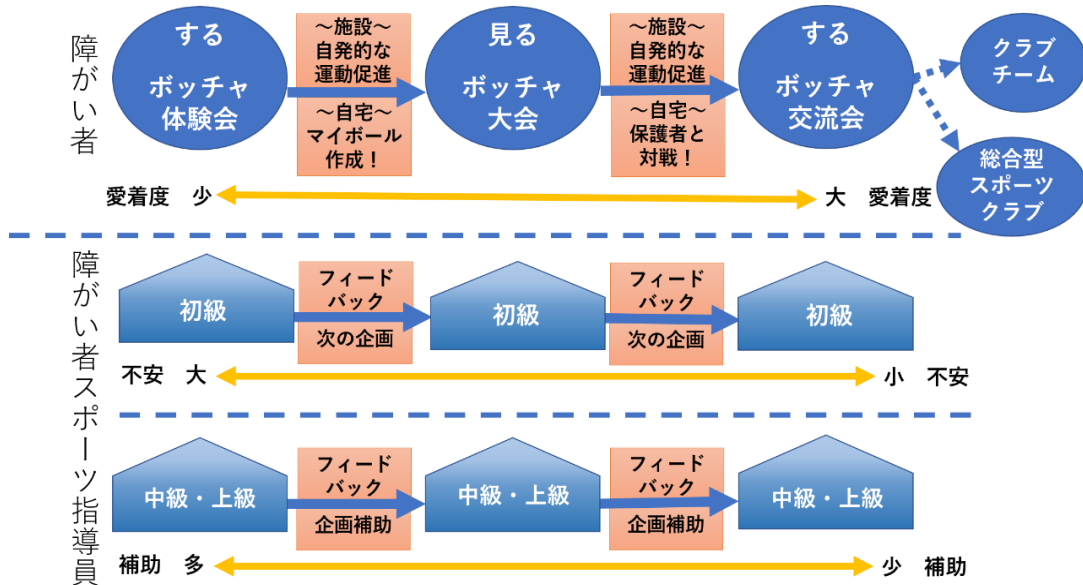


図4.支援策の全体図

イ、運営体制

指導員、大学生、保護者が中心となって運営する「実行委員会」を、社会福祉施設、障がい者スポーツ協会、社会福祉協議会が連携して支える。ここでの「実行委員会」は大学生、保護者がボランティアとして指導員の指導の補助やイベントの運営を行う。この運営体制では、参加者は知識のある指導員のもとで安心してスポーツを行うことができ、指導員は現場で上位の指導員から学び、自らの成長につなげることができる。参加する人も指導することのできるイベントを創り出すための運営体制とする。

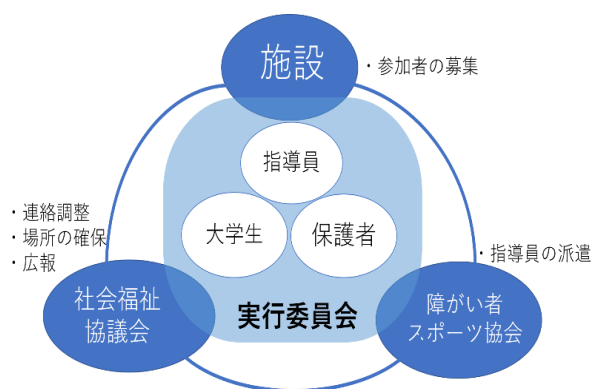


図 5.運営体制

ウ、期待される効果

- ・障がい者スポーツを普及する機関同士が連携することで、それぞれの不足している部分を補いあい、障がい者を中心としてそれぞれの機関が win-win 関係を構築できるとともに、多方面からのサポートが可能となる。
- ・自分より上位の指導員と共に活動することによって、初級指導者の不安が減少し、現場で自信を持って指導できることに繋がる。また、昇級のために必要な活動時間を確保することができ、初級から中級へ昇級しやすくなり、資格保持者の資格活用に繋がる。
- ・「する」「みる」というイベントと日常的な活動を継続し、地域のクラブ等に繋ぐことで、特別支援学校卒業後の障がい者のスポーツライフを構築することができる。

4. 参考文献

- ・文部科学省（2012）「特別支援教育について」
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/013.htm（参照日 2017 年 9 月 10 日）
- ・文部科学省（2016）「地域における障害者スポーツの普及促進について」, p. 6
- ・笹川スポーツ財団報告書（2015）「健常者と障害者のスポーツ・レクリエーション活動連携推進事業（地域における障害者のスポーツ・レクリエーション活動に関する調査研究）」
- ・東京都（2012）「東京都障害者スポーツ振興計画」, p. 17
- ・山本愛（2012）「特別支援学校卒業後の知的障害者スポーツの現状と課題」
<http://sport.edu.ibaraki.ac.jp/semi/2012/36.pdf>（参照日 2017 年 6 月 16 日）